

「関東手話通訳問題研究会」が発足するまで

平成15年9月21日、関東の全支部が東京支部事務所に一堂に集まり、「関東手話通訳問題研究会」の発足を確認した。このブロック発足は本部の方針に基づき、関東でも発足に向けての取り組みに約1年間を費やし実現させたものである。この発足までの経過を述べこれまでの関東の足跡を会員で確認したい。

関東はこれまで、関東ブロック連絡会と称し、他のブロックと違って明確な規則、役員などを決めずに運営してきた。それにもかかわらずスムーズに連絡会で各支部との連絡調整や情報交換を行ってきた。しかしながら、関東ブロック手話通訳問題研究会開催時の責任の所在やブロックから推薦して本部運営委員を選出させなければならないことなどが生じ、きちんとした組織体制を作らなければならない状況になった。また、折しも本部でもブロック体制強化の方針が出された。本会の発足はこのような状況を踏まえての結果である。

さて、この「関東手話通訳問題研究会」の前身である関東ブロック連絡会の発足は何時であったのであろうか。残されたわずかな資料と人の記憶に頼って探ってはみたが、正確なことはわからなかった。しかし、残された数少ない資料と記憶から以下のことがわかった。

昭和56年7月5日、関東ろう連の呼びかけで、関東支部代表者会議が中野文化センターで開催され、翌年の1月15日にも会議がもたれた。また、昭和57年にも、関東地区手話通訳活動者会議が、同じく関東ろう連の呼びかけで行われている。これは、各県ろう団の手話通訳対策部と手話通訳者個人が対象となっていたもので、当時、関東で結成されていた全通研5支部は、個人に呼びかけるのではなく、「支部という組織にきちんと呼びかけてほしい」との要望を出した。関東ろう連には、その後、数年間に渡って同じ内容を要望してきたが、組織対応がなかなか実現できなかったこともあり、支部ができていく都県で集まることになった。ほぼ2か月に1回集まるようになったのは、東京支部が事務所を設けるようになった昭和60年度からである。

昭和60年度は、皆さんの記憶に鮮明に残っていることと思うが、あの「手話通訳制度調査検討委員会」の報告書が発表された年でもある。この報告書は、手話通訳者の役割を狭い意味でのコミュニケーションの仲介者とするような問題を抱えていた。その一方、手話を独自の言語として認め、聴覚障害者の社会生活上の様々な問題点を提起し、専門職としての手話通訳者の養成、認定、設置、派遣の必要性和新たな手話通訳士制度の導入を提起したものである。

これらの課題に対して、手話通訳者の必要性について広く国民に知ってもらい、国民の支持で手話通訳制度を確立する方法を全日本ろうあ連盟と全通研は検討した。その結果が、国民の1%にあたる120万部の「アイラブ・パンフ」の普及運動につながったのである。

このとき、東京でこの報告書を巡って様々な学習会や集会が開催されていることや昭和61年2月8・9日に東京で冬の討論集会が開催されている。

これらを契機にして関東でも全通研の支部が集まり関東ろう連と組織的な対応ができる組織づくりと手話通訳制度やそれについての学習会に取り組んでいかなければならない状況から、内外に正式に表明した訳ではないが「関東ブロック連絡会」を発足させた。残念

ながら設立期日ははっきりしない。会議場所としては、東京支部が初めて事務所を構えた下落合の「みやおか荘」を東京支部の好意によって無料で提供していただいた。玄関口に所狭しとたくさんの靴が並んでいたことを今でも鮮明に思い出す。

昭和60年度までに、関東の5支部（千葉、群馬、埼玉、東京、山梨、）が結成されており、昭和61年2月に神奈川支部が結成した。その後、茨城、栃木が結成されて、平成元年には関東の8支部が揃った。

連絡会の会議は、昭和60年5月26日に行われ、それ以後、今日まで、隔月に開催していることが記録されている。昭和62年3月14・15日には、関東ブロック制度化一泊研修会が東京青年文化会館にて開催され、3月22・23日、アイラブ・パンフの中央行動の内容について論議をしようと呼びかけが行われている。

そして、関東最初のブロック手話通訳問題研究討論集会在昭和62年12月5・6日の一泊二日で山梨大学にて開催された。この日は、大変寒い日で雪が舞い散っていた。次の日は公民館などに会場を移して研修を続けた。また、泊まったところも柳家という老舗の旅館であった。風呂に入っていると空から雪が降ってくるという今で言う癒しのたっぷり溢れた研修会となった。

関東ブロック集会は、山梨に引き続いて群馬、神奈川、茨城、栃木において開催した。その後、全国集会を開催しない支部を回るという約束ができ、山梨、群馬、茨城、栃木の順で開催してきた。平成15年度からは、これまで全国集会未開催支部の開催条件をはずし、すべての支部を回す形で関東ブロックの集会を開催することになった。

次に、ブロックからの本部運営委員も昭和51年に石川氏、昭和56年の1年間だけ川根氏、その後すぐに昭和57年からの鈴木氏にバトンタッチされ、昭和61年に監査役として岩井氏、会員増に伴い運営委員の増員が図られ、平成2年に渡辺、平成11年に村石氏が選出されている。関東の暗黙の了解ではないが、支部会員の多い支部から順に運営委員を出していくことで了承された。

そして、「関東手話通訳問題研究会」が平成15年9月21日に行われた関東ブロック連絡会で、全支部の賛同を得て、会則が承認され、新たに役員を選出し、新しいスタートをきった。

会長に石川氏（東京）、副会長に高田氏（栃木）、事務局長に竹内氏（神奈川）、会計に江原氏（東京）、監査に鈴木氏（埼玉）、村石氏（神奈川）、渡辺（千葉）が決まった。

関東は全国一の会員数を抱える大きな組織として成長してきた。今後も、手話通訳制度に関する課題、聴覚障害者のくらしに関わる課題について、少しでも解決を図るため、関東ブロックの良さを引き継ぎ新たな組織になった「関東手話通訳問題研究会」を関東の8支部の会員全員で充実・発展させていきたいものである。

平成15年11月16日

全国運営委員 渡辺正夫